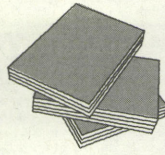


水の流るるがじゆく、風のゆくがじゆく

佐治由美子

倉橋の保育をひと言で表すとするなら、「さながら」という言葉を思い浮かべる方が多くいらつしやることでしょう。ところが、倉橋の著書^{ひもと}を繙いてみると、「さながら」がまとまった論考として書かれている箇所は見当たらず、『幼稚園真諦』（倉橋惣三文庫1 フレーベル館 二〇〇八年）などに散見されるにとどまっていることに改めて気づかされます。それにもかかわらず、「さながら」の言葉が保育関係者に浸透しているのは、何を意味しているのでしょうか。

一つには、「さながら」が、倉橋の保育思想の中心に位置付けられていることによるのでしょう。倉橋の描き出した幼稚園保育法の道筋をたどってみると、それは子どもの「さながら」の生活を生かすことに始まり、設備による保育とその設備を生かすものとなる子どもの自由感が続きます。その上で、子どもが充分に遊ぶことにより満たされてある自己充実、さらに、自己充実ができているかどうかに重きを置く、子どもの側に



立つた充実指導、そして、子どもの興味に即して活動に中心を与えていく誘導が加えられ、最後に、幼稚園教育ではほんの少しだけ加えられるとする指導が続きます。この一連の流れの中で、倉橋が「さながら」の生活を保育法の出発点に置いたという事実が、保育関係者に強い印象を与えてきたのではないかと思います。

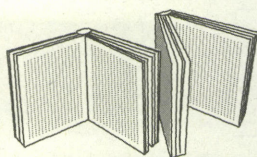
またここで、もう一つ考えを進めるならば、次のような意味が浮かび上がります。子どものさながらの生活を大切にしたい、つまり、子どもが「真にそのさながらで生きて動いているところの生活」を尊重して保育を進めたいという保育者の願いが、実践の中で脈々と受け継がれてきたことを物語っているとみることもできましょう。

〔幼稚園真諦〕 p. 18～50 参照

生活と生命と

倉橋は、「就学前の教育」〔倉橋惣三選集第三巻〕フレーベル館 一九六五年の「生活としての自然」を説明する文章の中で、「さながら」を次のように表現しています。

「生活としての自然は、こうした自発的、全的な生活が当然もつところのものであるが、特に、意識をもつて作り出され、また作りかえられていないところのものであるが、さながらなる点を指している。いいかえれば、生活としての純なるあらわれのままである。その時、生活は無我的であり、没我的であり、一点の自意識も効果意識も伴わない。従つて、たとえば水の流るるがごとく、風のゆくがごとく、一切の努力感



をも伴わない。快であつて快でなく、苦であつて苦でなく、一つにこれ自然である。」

ここで倉橋は、「さながら」を、「生活としての純なるあらわれのまま」と言い換えています。ここで言われている生活は少しさかのぼると「自発的、全的な生活」を指していることがわかります。そこで、この生活の実質を表す「自発的」「全的」という言葉についてここで考えてみましょう。

「自発的」であることについて、倉橋は、「その自発原動が、（中略）内なる生命から発動するものでなければならぬ。」と述べています。自発的な生活という時の生活を英語で表すと *spontaneous*、また、内なる生命という時の生命も英語で表すと同じく *spontaneous* であることから、倉橋が生活をいきいきとした生命という言葉から説明しようとしていることに気づかれます。また、「全的な生活」については、「最も具体的な姿」であると彼が説明していることを併せると、生活という言葉は、生命が具体的に現れた姿として語られていると考えられます。（「就学前の教育」 p. 427～429 参照）

このように、生命の発現を土台に据えた倉橋の保育原理は、幼稚園教育の中で長年にわたって守り伝えられてきたのですが、近年のいわゆる幼保一体化の議論の波間で揺れ動き、そのゆくえが不透明になってきています。社会変化に伴うこのような保育施設上の検討がされていく中で、原点に立ち返って子どもの生活を見つめる視座が、いまこそ必要な時を迎えているように思われます。

（お茶の水女子大学専任講師）